ふるさと発見　第７集

掛川の浮世絵版画

掛川市教育委員会

掛川の浮世絵版画

序にかえて

ふるさと発見シリーズ第７集「掛川の浮世絵版画」を発刊することになりました。これは江戸時代末期から明治初期にかけてさかんに描かれた「東海道」の浮世絵の中から、掛川、日坂に関するものを選び出し、一冊にまとめたものです。

浮世絵は江戸時代初期、江戸の庶民社会からうまれ、庶民の間に広がっていった風俗画の一種です。はじめの頃は役者絵や美人画が中心に描かれていましたが、幕末になって旅行や物見遊山が流行し、庶民の関心が芝居や遊里から戸外に移るにつれて、風景画が多く描かれるようになりました。その中で特に有名なのが、葛飾北斎の「富嶽三十六景」と安藤広重の「東海道五拾三次」であり、皆さんにもなじみの深いものであります。しかし意外に知られていませんが、北斎も「五十三次」を描いており、広重も20数種の「東海道もの」を出していて、そのほかにも多くの絵師が、それぞれの個性で「東海道」を描いております。

このたび浜松市美術館、柴田孝雄氏および中川長一氏のご厚意により、貴重なコレクションの中から、掛川、日坂の街道の風物を題材とした49点の浮世絵版画を借用し、本書に掲載させていただきました。これらは北斎、広重をはじめとして英泉、国貞、国芳など幕末を代表する９人の絵師によって描かれたものです。

本書は、ふだんあまりなじみのない、掛川、日坂を描いた浮世絵版画を紹介するものですが、この中から掛川の当時の街道の様子や風俗等「その光と影」を少しでも感じとっていただき、ふるさと再発見の一助として利用されるとともに、生涯学習の一環として、広く芸術文化に親しんでいただくきっかけになれば幸いです。

昭和61年３月吉日

掛川市教育委員会

教育長　伊　藤　昌　明

浮世絵版画について

浮世絵は、室町末期から近世初期にあけて描かれた肉筆風俗画の影響を受け、江戸の庶民社会から発生し、版画技術の発展とともに大衆化した風俗画の一種である。その創始者は〝見返り美人〟で有名な菱川師宣(もろのぶ)だといわれている。

初期の頃は、庶民生活の中に溶けこんでいた遊里や歌舞伎を主要な題材とし、美人画や役者絵が多く描かれた。その後、それまでの筆彩版画から、色彩版画が見られるようになり、鈴木春信らの創意工夫によって多色摺(ず)りの技法が開発され、十数度摺りも可能となり、色彩豊かな版画の世界を創(つく)りあげた。

寛政年間には喜多川歌麿が大首や半身像を美人画に取り入れ、東洲斎写楽も大首の役者絵を描き、人間の表情を豊かに表現した。ここに浮世絵版画は全盛期を迎えた。

文化・文政期以降、美人画や役者絵はしだいに衰退していったが、他面からみれば、江戸の庶民文化が広く、低い層にまで浸透した時期でもあった。

こうした中で、歌川派はしだいに勢力を拡げていった。歌川豊国は、役者絵や美人画にすぐれた作品を残している。歌川様式は豊国から国貞・国芳へと受け継がれたが、特に国芳は〝武者絵の国芳〟といわれるくらい、自由で大胆な武者絵を描いた。溪斎英泉(けいさいえいせん)は美人画を得意とし、退廃的な特有の色香をみごとに描き出している。

江戸時代末期になると、江戸を中心として諸国への街道が整備され、伊勢参りや物見遊山の旅が盛んに行われ、庶民の関心がそれまでの歌舞伎や遊里の享楽の場から戸外へ移るにつれて、風景画が多く描かれるようになった。

葛飾北斎はそれまで学んできた和漢洋の画法を融合し、洋風表現を大胆に取りいれた「富嶽三十六景」を発表した。その独特の構図と誇張された自然描写は、見る人の心に強く訴えるものがある。

北斎よりややおくれて登場した安藤広重は、北斎の激しい画風とは対照的に、静寂でおだやかな風景画を描き出している。

広重は天保3年（1832)、幕府の行列に随行して東海道を旅したが、その体験や印象を描いた「保永堂版東海道五拾三次」はたいへんな好評を得、つぎつぎに多くの「東海道もの」を発表した。その数は二十数種といわれている。その中で特にすぐれていると思われるものは、天保13年（1842）ころの「行書東海道」、視点を変えて風景をとらえた「狂歌入り東海道」、洋風表現を巧みに取り入れた「隷書東海道」、人物を中心にして描いた「人物東海道」などである。

ところでこれら続絵のなかの日坂、掛川を見ると、日坂はほとんど小夜の中山と夜泣き石が描かれており、掛川は大池の秋葉山一の鳥居と常夜灯が描かれている。広重が掛川の地を旅して、一番印象的であり、絵になる風景だったのであろう。

広重の風景画は、門弟の二代・三代広重はいうまでもなく、他の絵師たちにも影響を与えた。それまで街道ものに目もくれなかった美人画絵師や武者絵の絵師までが、「東海道」を描くようになった。国貞、国芳、英泉らがそうであるが、国貞などは「保永堂版東海道」をそのまま背景に取り入れてしまっている。

江戸時代末期の浮世絵は、北斎、広重の活躍によって活気を呈したが、やがて明治になり、しばらくは美人画や役者絵も描かれ、また文明開化期の東京や横浜の新風俗を写した報道的な版画もさかんに作られたが、内容はしだいに低下してゆき、浮世絵版画は明治30年代には消えていった。しかしこの頃ヨーロッパへ渡った浮世絵版画が、ヨーロッパ印象派の画家たちに影響を与えたことを見逃すことはできない。

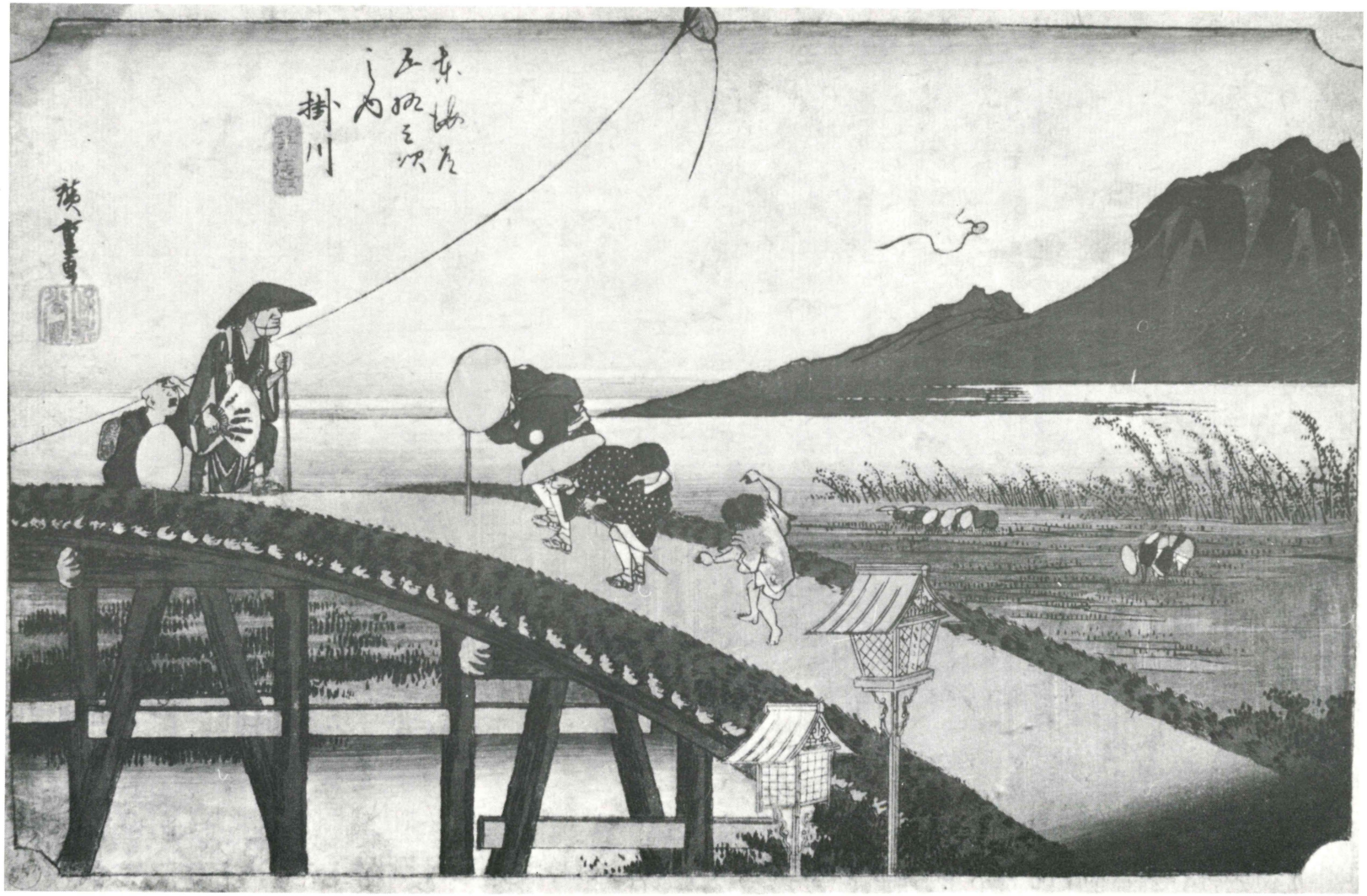
5　安藤広重　狂歌入り　東海道五拾三次　日阪

17　安藤広重・三代豊国　雙筆五十三次　懸川

19　安藤広重　五十三次名所図会　廿七　懸川　秋葉道四十八瀬ごへ

44　三代豊国　東海道　掛川

1　安藤広重　保永堂版　東海道五拾三次　日坂



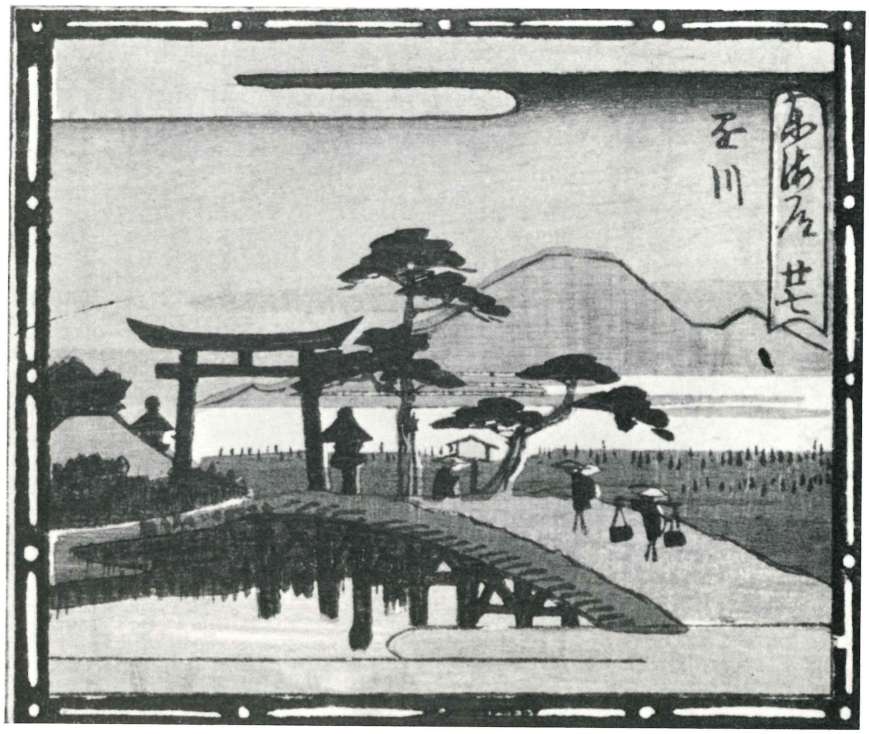
2　安藤広重　保永堂版　東海道五拾三次　掛川

3　安藤広重　行書　東海道五十三次　日阪　小夜の中山夜啼石　無間山遠望

4　安藤広重　行書　東海道五十三次　かけ川　秋葉道追分之図

6　安藤広重　狂歌入り　東海道五拾三次　掛川

7　安藤広重　山庄版　東海道　廿六　日坂



8　安藤広重　山庄版　東海道　廿七　懸川

9　安藤広重　有田屋版　東海道　廿六　日坂

10　安藤広重　有田屋版　東海道　廿七　懸川

11　安藤広重　蔦屋版　東海道　廿五　日坂

12　安藤広重　蔦屋版　東海道　廿六　懸川

13　安藤広重　　隷書　東海道　廿六　日阪

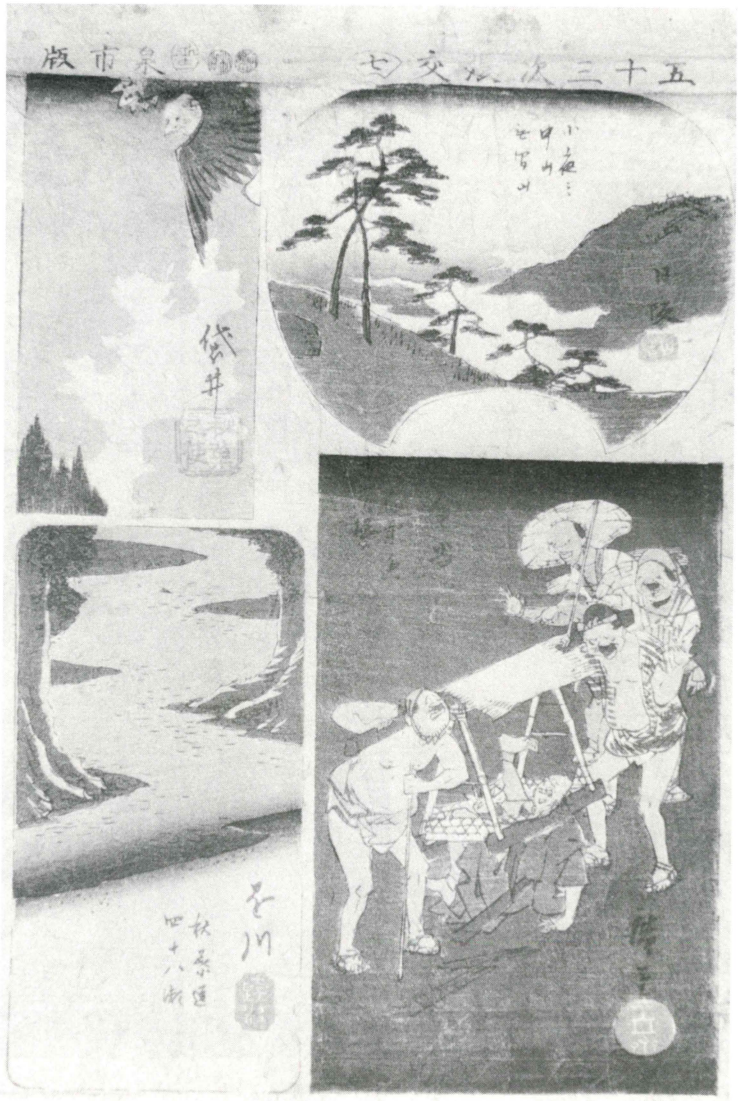
14　安藤広重　人物東海道　五十三次　日阪

15　安藤広重　人物東海道　五十三次　懸川

16　安藤広重・三代豊国　雙筆五十三次　日坂　小夜の中山　無間山遠望

18　安藤広重　五十三次名所図会　廿六　日坂　小夜の中山　無間山遠望

21　安藤広重　東海道張交図会　嶋田・金谷・日阪



20　安藤広重　五十三次張交（七）　金谷・日阪・懸川・袋井

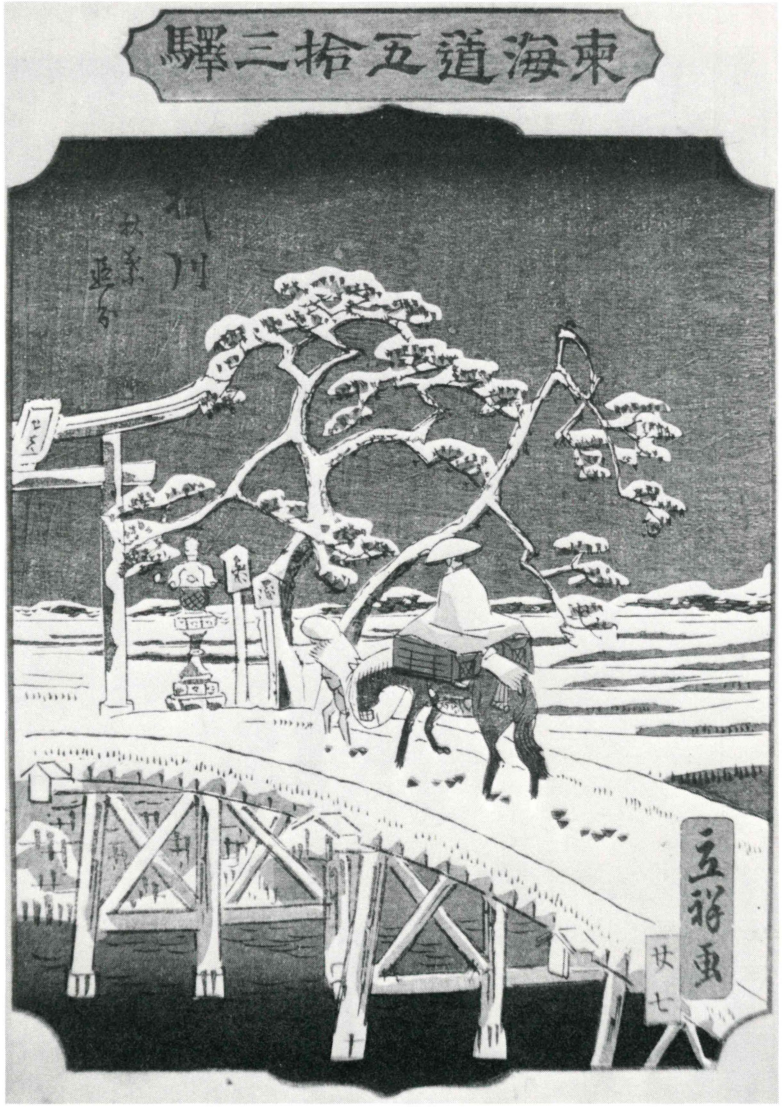
22　重宣（二代広重）　東海道五十三次　廿六　日坂

23　重宣（二代広重）　東海道五十三次　廿七　懸川

24　二代広重　末広五十三次　掛川

26　二代広重　東海道　掛川

25　二代広重　東海道　日坂



28　立祥（二代広重）　東海道五拾三駅　廿七　掛川　秋葉追分

27　立祥（二代広重）　東海道五拾三駅　廿六　日坂　さよの中山

29　三代広重　東海名所 改正道中記　廿九　掛川　秋葉道追分

30　葛飾北斎　掛川

32　葛飾北斎　懸川

31　葛飾北斎　日坂

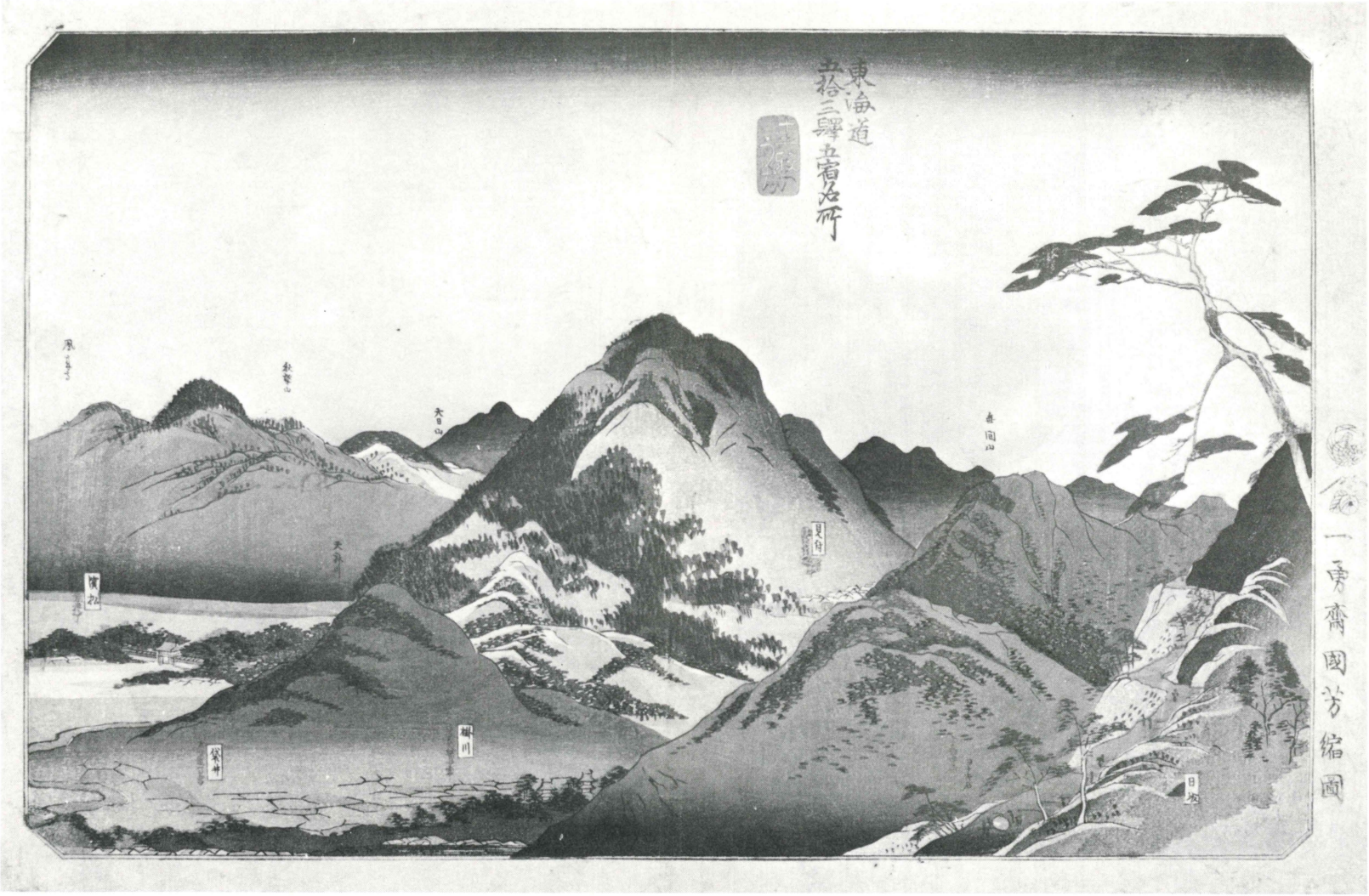
33　葛飾北斎　東海道五十三次　二十六　日坂

34　葛飾北斎　東海道五十三次　二十七　掛川

35 溪斎英泉　掛川宿　廿七

37　香蝶楼国貞　東海道五十三次之内　掛川之図

36　香蝶楼国貞　東海道五十三次之内　日坂之図



38　一勇斎国芳　東海道五十三駅五宿名所　日坂より浜松

39　一勇斎国芳　東海道五十三対　日坂

40　一勇斎国芳　東海道五十三対　掛川

42　三代豊国　東海道五十三次之内　掛川　刀屋半七

41　三代豊国　東海(道)五十三次之内　日坂　けいせい梅が枝

43　三代豊国　東海道日坂掛川間　本庄権八

45　月岡芳年　東海道名所図絵　掛川　秋葉山遠景

47　歌川芳虎　書画五拾三駅　掛川　強盜之夜行

46　歌川芳虎　書画五拾三駅　日坂　小夜中山無間鐘

49　盆景五十三次　懸川　をいけ

48　盆景五十三次　日坂　さよの中山

掛川の浮世絵版画 目録

番号	作　　者	題　　名	判　型	年　代
1	安藤広重	保永堂版　東海道五拾三次　日坂	横大判	天保4年
2	〃	〃　掛川	〃	〃
3	〃	行書　東海道五十三次　日阪	横間判	天保13年
4	〃	〃　かけ川	〃	〃
5	〃	狂歌入り　東海道五拾三次　日阪	横中判	天保末年
6	〃	〃　掛川	〃	〃
7	〃	山庄版　東海道　廿六　日坂	8つ切り	〃
8	〃	〃　廿七　懸川	〃	〃
9	〃	有田屋版　東海道　廿六　日坂	4つ切り	弘化年間
10	〃	〃　廿七　懸川	〃	〃
11	〃	蔦屋版　東海道　廿五　日坂	横中判	嘉永初年
12	〃	〃　廿六　懸川	〃	〃
13	〃	隷書　東海道　廿六　日阪	横大判	〃
14	〃	人物東海道　五十三次　日阪	縦中判	嘉永末年
15	〃	〃　懸川	〃	〃
16	広重・三代豊国	雙筆五十三次　日坂	縦大判	安政2年
17	〃	〃　懸川	〃	〃
18	安藤広重	五十三次名所図会　廿六　日坂	〃	〃
19	〃	〃　廿七　懸川	〃	〃
20	〃	五十三次張交（七）　金谷・日阪・懸川・袋井	〃	嘉永5年
21	〃	東海道張交図会　嶋田・金谷・日阪	〃	嘉永初年
22	重宣（二代広重）	東海道五十三次　廿六　日坂	横小判	安政元年
23	〃	〃　廿七　懸川	〃	〃
24	二代広重	末広五十三次　掛川	縦大判	文久3年
25	〃	東海道　日坂	縦中判	元治元年

26	二代広重	東海道　掛川			縦中判	元治元年
27	立祥(二代広重)	東海道五拾三駅	廿六	日坂	〃	慶応年間
28	〃	〃	廿七	掛川	〃	〃
29	三代広重	東海名所改正道中記	廿九		縦大判	明治初年
30	葛飾北斎	掛川			横小判	文化元年
31	〃	日坂			〃	〃
32	〃	懸川			〃	〃
33	〃	東海道五十三次	二十六	日坂	縦中判	〃
34	〃	〃	二十七	掛川	〃	〃
35	溪斎英泉	掛川宿　廿七			縦大判	文化末
36	香蝶楼国貞	東海道五十三次之内	日坂之図		縦中判	天保末
37	〃	〃	掛川之図		〃	〃
38	一勇斎国芳	東海道 五十三駅五宿名所			横大判	天保中期
39	〃	東海道五十三対	日坂		〃	弘化年間
40	〃	〃	掛川		〃	〃
41	三代豊国	東海(道)五十三次之内	日坂	けいせい梅が枝	縦小判	嘉永年間
42	〃	〃	掛川	刀屋半七	〃	〃
43	〃	東海道日坂掛川間	本庄権八		縦大判	
44	〃	東海道　掛川			〃	文久3年
45	月岡芳年	東海道名所図絵	掛川	秋葉山遠景	〃	明治元年
46	歌川芳虎	書画五拾三駅	日坂	小夜中山 無間鐘	〃	明治5年
47	〃	〃	掛川	強盗之夜行	〃	〃
48		盆景東海道五十三次	日坂	さよの中山	縦小判	文政年間
49		〃	懸川	をいけ	〃	〃

作者略歴

安藤広重

寛政9年～安政5年（1797～1858）62歳

通称重右衛門、のち徳兵衛。広重のほかに一遊斎・立斎・歌重の号がある。画姓歌川。13歳で家督を相続し、江戸定火消同心職につく。15歳の時歌川豊広に入門。翌年広重の名を許され一遊斎と号す。文政6年(1823)火消同心を引退し、画業に専心する。天保3年(1832)幕府年中行事の〈八朔御馬献上〉の行列に随行して上洛。その東海道の体験や印象を基礎に、翌4年「東海道五拾三次」保永堂版を発表。一躍世に認められ、風景画家への道を歩む。他に「木曽海道六十九次」「名所江戸百景」など多くの名作を残した。

二代広重

文政9年～明治2年（1826～1869）44歳

鈴木氏。通称鎮平。画号は重宣・広重II・喜斎・立祥。画姓歌川。安政6年(1859)、師広重の養女辰の婿として安藤家に入る。のち師家を去り、喜斎立祥を名乗る。初代の画風にならい、風景画の模倣や美人画を描いた。

三代広重

天保13年頃～明治27年（1842～1894）53歳

後藤氏。画号重政・広重III・立斎・歌重。画姓歌川。慶応1年（1865）広重IIが師家を出た後、替って同家を継ぐ。慶応から明治にかけて、横浜絵・東京名勝絵・文明開化絵を多く製作した。

葛飾北斎

宝暦10年～嘉永2年（1760～1849）90歳

幕府御用鏡磨師中島伊勢の養子。名を鉄蔵。北斎・春朗・宗理など30余の号がある。19歳の時、勝川春草の門に入る。天保3年(1832)の「富嶽三十六景」は、独特の構図をとり入れ、風景画の新分野を拓(ひら)いた。生涯を通じ、あくなき探究心を燃焼させた北斎の画風は、ヨーロッパ印象画壇にも影響を与えた。

渓斎英泉（けいさいえいせん）

寛政2年～嘉永1年（1790～1848）59歳

池田氏、通称善次郎。号を英泉・渓斎・国春楼。幼年より狩野派を学び、ついで菊川英山に入門した。美人画を得意とし、特有の色香を漂わす。安藤広重との合作になる「木曽街道六十九次」は有名。

歌川国貞（くにさだ）

天明6年～元治1年（1786～1864）79歳

角田(すみだ)氏。通称庄蔵。号を国貞・五渡亭・香蝶楼・豊国III。画姓歌川。初代歌川豊国の門に学び、のち三代豊国となる。猫背で猪首(いくび)型の美人画を描き、時好に合い流行、独自の境地を拓(ひら)いた。

歌川国芳

寛政9年～文久1年（1797～1861）65歳
通称孫三郎、井草氏。号を国芳・一勇斎・採芳舎・朝桜楼。画姓歌川。初代豊国の門人で、武者絵にすぐれた才能を発揮した。また、写実的な洋風表現の風景画にも傑作を残した。

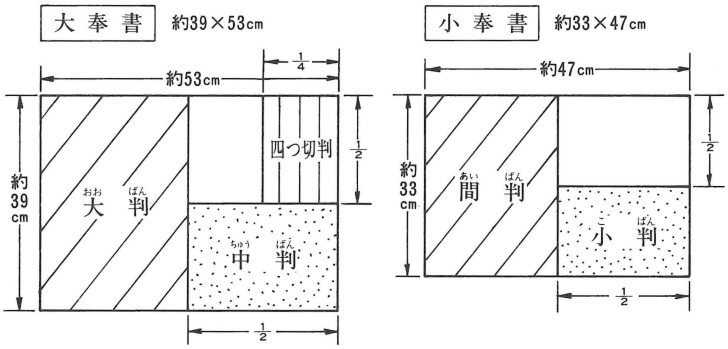
月岡芳年

天保10年～明治25年（1839～1892）54歳
本姓吉岡氏、のち浮世絵師月岡雲斎の養子となる。号を芳年・玉桜・魁斎・大蘇。画姓月岡。歌川国芳に師事。歴史画を得意とし、洋風技法も取り入れた。写実的な浮世絵師として、明治初期に盛名をはせた。

歌川芳虎

生没年不詳
永島氏、名は辰五郎。画号芳虎・一猛斎・錦朝楼。画姓歌川。国芳の門人で、師ゆずりの武者絵を得意とした。明治期には横浜絵・開化絵などをおもに描いた。

判型について



資料提供者

1 2 3 7 8 9 10 11 12 13 16 18 21 22 24 25 27 28 29 31 32 33 34 38 41 42 45 48 49	……浜松市松城町　浜松市美術館
4 5 6 15 17 19 26 35 36 37 40 47	……掛川市道神町　柴田孝雄氏
14 20 23 39 43 44 46	……掛川市紺屋町　中川長一氏
30	……掛川市笠屋町　川出茂市氏

参考文献

「浮世絵版画」　浜松市美術館
「原色 浮世絵大百科事典」　大修館
「コンサイス人名辞典」日本編　三省堂
「ブリタニカ国際大百科事典」　ティービーエス・ブリタニカ

文化財愛護シンボルマーク

掛川の浮世絵版画

昭和61年３月発行

編集
発行　掛川市教育委員会

印刷　株式会社　ぎょうせい

秋きてふ
風の名
あれと
春風ち
かけし
くもめの
ふるふ
ふ吹
時尾
時俊